

MA・SO・BO 通信

寄稿 現代人形劇のはじまり(後編)

人形劇の図書館 瀧見英明

日本は世界でも類を見ない人形劇大国です。人形劇という言葉も、たとえば、あやつり、木偶、人形まわし、人形浄瑠璃、人形戯、等々さらに驚くほどたくさん同義語、類語があり、100年前の「現代人形劇」の登場によってそれまでの人形芝居は「伝統人形芝居」となり、以降は現代的なものを「人形劇」、伝統的なものは「人形芝居」というように区別されるのが一般的になりました。

現代人形劇100年の様々な催し

「現代人形劇」は1923年、つまり100年前に始まり、去年の2023年が100年の節目でした。それは人形劇の世界ではなぜかあまり話題にならなかったのに、人形劇の外側の分野では「現代人形劇の100年」は意外なといえる反応がありました。外側の分野というのは、例えば日本人形玩具学会とか日本ヴィクトリア朝文化研究学会といった学術団体に、各大学や複数の博物館などですが、人形劇の外側にはいろいろな関連する分野があり、人形劇からはそうした分野と日頃からの付き合いがあまりないけれども、外側からは人形劇の様子を注視しているのだといえます。

「現代人形劇の100年」の様々な催しのその多くが人形劇の外側のものであって、人形劇の内側では展示の一部を除きほぼなかったといえるのは面白い現象ではありますが、どのような催しがあったかといえば、展示企画として、吹田市立博物館、西宮神社(信仰資料展示室)、なにわ人形劇フェス、いいだ人形劇フェスタ、聖徳大学(松戸)、横浜人形の家(博物館・あかいくつ劇場)、京都女子大学等で「人形劇の図書館コレクション」を中心とした展示が開催されました。そしてシンポジウムが、吹田市博、いいだフェスタ、聖徳大、横浜人形の家、ヴィクトリア朝学会で、研究発表が、表象文化論学会、人形玩具学会、講演もヴィクトリア朝学会、公開研究講座が神奈川大学、京女大といったような展開でした。

なぜ、このような展開があったのか、それは人形劇にそれぞれの分野との関りがあるから他なりません。英国のヴィクトリア朝時代には、よく知られる「パンチ&ジューディ」などもそうですが「マリオネット」の興行も盛んで、その一つ「ダーク人形座」がやってきて1897年日本で初めて西洋の人形劇が演じられたのがまさしくヴィクトリア朝のマリオネットなのでした。人形玩具学会には「人形劇研究部会」があり、毎年開催の研究発表大会の23年度のテーマが「現代人形劇の100年」で6本の研究、論考の発表があり、横浜の展示・シンポジウムといいだ人形劇フェスタでの展示・シンポジウム等々は人形玩具学会の主催であり、神奈川大学では「戦時下の紙芝居と

現代人形劇の交差点」、表象文化論学会は「ダンスと人形」と、とこういった動きがあったことを人形劇の側がほぼ知らずのままに来ているのは、なぜなのでしょう。

それは一つには、上演する・観るといった本来の人形劇の活動は盛んであり、底辺も広がっていますが、外側との関りも含め、上演だけでなく、例えば批評するとか、研究するとか、コレクションとか、等々の人形劇の文化といえる展開に対する興味が希薄だからということかもしれません。

世界でも日本でも近年、児童劇はもちろん、演劇、ダンス、バレエ、ミュージカル、さらには音楽やサーカスといった分野までにも、オブジェクトシアターを含む現代人形劇は相当な影響をもたらせており、人形劇が孤立した特別な分野ではなくむしろ幅広い舞台表現芸術の最先端にあるのだといえ、人形劇がひとり勝手に閉じこもっている状況ではないといえるでしょう。

北海道の人形劇に思うこと

北海道の人形劇は歴史的に見ても日本の人形劇の中で一歩先を走っていて、「人形劇フェスティバル運動」の始まりは1959年旭川の全道人形劇フェスがきっかけで全国へ広がり、公立人形劇場の最初も1976年のこぐま座で、こうした活動が1988年のUNIMA名古屋大会・世界人形劇フェスへとつながって、札幌・北海道の活動は、まさしく日本の人形劇フェスのパイオニアであり、それを当初からアマチュア主体で成しえてきたのは驚きで、北海道の人形劇の大きな意味がそこにあるといえるのではないだろうか。

つまりそこにはアマチュアとしても質の高さがあるからで、1992年からの「えりっこ」が唯一の専門劇団として北海道の人形劇水準を引き上げていく指標となり、なによりもこぐま座とやまびこ座という十分に活用されている場があり、そこに集う皆さんの意欲と情熱が形成され、成果として、小さく固まらずに、人々とつながり、人を育て、いくつもの挑戦をし、道フェスなど現代人形劇100年の中に65年も継続している。それらは遠く離れた位置にいる私などにはとても眩しい光景なのです。

注：文中の「フェス」は「フェスティバル」を省略したもの。また、各団体等の初出以降は省略表記しています。

瀧見 英明(かたみ えいめい)

京都生れ育ちの、人形劇に55年ほどつづりの、人形つかい。小さな子どもたちを主たる対象の、人形劇・トロッコを主宰、日本で唯一の人形劇専門図書館も創設、運営しています。また、現代人形劇を中心にして、東北の猿倉人形芝居などの研究者。さらに国際人形劇フェスなどの企画制作などと幅広い。



障害のある子もない子もみんなで創る ～人形劇によるソーシャルインクルージョンの取り組み

(前回からのつづき)次に人形劇「イソップ」の準備です。人形劇では、子どもたちは風の精となりオムニバスで進む3つのショートストーリーを進めていく役柄。今回は自分の衣装を自分たちで作ります。いろいろな色の画用紙の葉っぱをビニールに貼り付けて思い思いに衣装を作っていきます。素早く飾り付けをしていく子、じっくりと考え抜いてこだわりの子、かわいく仕上げる子、一見何も考えていないように見えるができあがりの衣装を見ると「あっ!」と驚くほどのセンスが光る子、こちらの想像をはるかに超えた衣装が続々とできあがってきます。子どもたちは、その衣装を着て大はしゃぎ。その中で小学4年生の発達障害のKくんは、絵や工作がとっても大好き。



ちりばめた葉っぱだけでは物足りず、なにやら画用紙で小さな虫を作り始め、葉っぱから顔を出してる芋虫を所々に散りばめました。「それ、いいじゃん!」と大人スタッフと盛り上がり、まんざらでもない表情のKくんでした。

一方で、白い紙を前にしてなかなか筆が進まない小学5年生のRくん。彼も発達障害、協調運動障害でこだわりも強く、工作や絵を描くのが大好きな子です。いつもは、自分の好きな鳥や虫の絵を夢中になって描いています。今回のもう一つのお題でもあったパンフレットに載せる自分の似顔絵を描いていました。似顔絵は得意じゃないと終始、不機嫌な顔。描いては消し、描いては消しを繰り返しています。時間切れギリギリにやっと自分の絵が完成!しかし、Rくんは納得がいかない様子。「どうした?」と聞くと「気に入らない」のひとつ。「それならRの好きな鳥の絵でもいいぞ」と言うと、少し考えて「いや、これでいい…」と。Rくんと出会ったのは4ヶ月前。実のところ、最初のころは言動も攻撃的で打ち解けてくれるか不安でした。しかし、自分の得意な工作を通じて少しずつ表情が柔らか

くなり、話しをしてくれるようになりました。今回も自分の中でなんとか折り合いをつけて頑張ろうとするRくん、そして次の人形劇の稽古では、以前は「運動は嫌い」と言っていたにも関わらず、みんなと一緒に、一生懸命踊ったり演じたり、時折見せる笑顔に、この事業の意味があったように思います。



矢吹 英孝(やぶさき ひでたか)

福島県出身。北海道教育大学函館分校卒業。現在、公財)さっぽろ青少年女性活動協会こども若者事業部長。国際人形劇連盟日本ウニマ理事、さっぽろ人形浄瑠璃あり座代表、人形劇団野良犬Plus®代表



本の案内人「本シェルジュ」
厳選本の紹介
岸さん編 ②

岸 春江(きはる え)

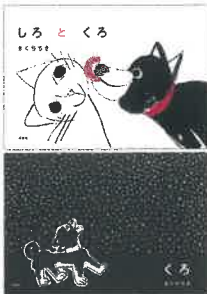
フリーアナウンサー・絵本ナビゲーター・絵本専門士
自宅に約3000冊の絵本を所有
主宰の絵本部「ファンタジア」は2019年 北海道読書推進運動協議会 「優良読書グループ 奨励賞」受賞



『しろとくろ』『くろ』

きくちちき/講談社

偶然出会ったネコの「しろ」とイヌの「くろ」。すぐに仲良くなって嬉しい気持ちが溢れます。そして、ふたりが会えない時間の「しろ」の悲しみと再会の喜びがシンプルなことばで描かれています。しかし、絵はダイナミック。絵本サイズは大きめですが、原画はそれを遥かに超える大きさの和紙に、作者が全身で筆を走らせたそうです。芸術作品として鑑賞するにもふさわしいこの絵本は、3年後にイヌが主人公の「くろ」も発行されています。「あいたい」という想い。「あえない」という切なさ。素直な心を繰り返し読むうちに、会いたい誰かが存在することの素晴らしさを感じます。あなたがいま会いたいのは、誰ですか?ぜひ、2冊続けて読んでみてください。



『たぶん、なんとかなるでしょう。続』

堀川真/福音館書店

やんちゃな2人の兄弟を育てる絵本作家ファミリーの子育てエッセイ漫画です。予想をはるかに超える子どもたちの行動やセリフに驚く日々をユーモアたっぷりに綴っています。子育て経験者なら、誰もが共感できることが盛沢山かと思いきや!ひとりっ子の女子しか育てていない私には、想像もしていない毎日が繰り返されていてとても新鮮でした。子育ての中で夫婦が気まづくなったり、イライラしたり、そんな日常も隠さず描かれていて、そこは共感でしかない家庭内。育児を笑いに変えると気持ちが切り替えられると参考になりました。現在私が感じている子育ての悩みも、たぶんなんとかなりますね。育児雑誌「母の友」に連載されていたエッセイです。



編集後記

中島児童会館は7月3日、75周年を迎えました。戦後まもなく物資が乏しい時代から、子どもたちのために汗をかいてきた先人の熱い想いが今に繋がっているのだと思うと責任は重大です。この先の未来、日本、世界はどうなってしまうのだろう...未来につづく子どもたちの幸せを灯し続けなければ!(柳本)

【オススメ】人形劇の図書館(1面寄稿)からの「人形劇ラジオ」ぜひ聞いてみてください。➔



お問い合わせ お申し込み

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからもご覧いただけます。

